

に切断の場合、血管を結紮して止血することが記載されており、頬の傷を今日の形成外科的な考え方で治す図が登場してゐる。扉ページには王母カトリヌとシャルル九世のイニシアルCが重ね文字になって出ている。

その後もパレは晩年七十五歳頃まで執筆改訂に意欲をもつて取り組んでいた。一五九〇年十二月二十日からちょうど四〇〇年目の命日にアンブローズ・パレ四〇〇年祭記念式典が東京で行われることが決定している。

(慶應義塾大学医史学研究室)

## 『窠篤児 (ワートル) 薬性論』の異版

宗田 一

林洞海訳補『窠篤児薬性論』には、①存誠齋、②旭窓、③英蘭堂の三種の蔵版主名をもつ異版がある。それら三種の封面には、すべて「安政三丙辰孟春新雕」の記載がみられるので、一般の図書目録にこれらすべてを安政三年(一八五六)版としているのが多い。

しかし奥付刊記に「安政三丙辰年正月刻成」と記すのは①のみで、また柱に「存誠齋蔵」とあるのが②③では削除されているから、明らかに②③は後版である。したがって①のみが初版本系とみてよい。

この①系の発行書賈は、和泉屋金右衛門(江戸横山町三丁目)、山城屋佐兵衛(同日本橋通り二丁目)、須原屋伊八(同浅草茅町二丁目)の三軒で、②系には嶋村屋利助(大門通難波町)が加わり四軒になっている。ただし、管見に入った②系の住所は東京となっている。

③系の英蘭堂島村利助の住所は、東京馬喰町二丁目とあり、この住所は明治十九年（一八八六）刊の『近世名医伝』の奥付住所と同一である。島村利助は、この住所から春木町に、のちに転居するので、③系より②系の方がこの住所からみて早い刊行とみられる。とすれば、林洞海自家蔵版の初版本系①が蔵版主を旭窓に変えて再版本系②となり、さらに英蘭堂に三転し、これが最終蔵版主となったものとみられる。ただし、②③の刊行年は不明である。②は明治以前に刊行された可能性を否定できないにしても、②系で江戸の住所をもつ奥付のあるものは管見に入っていない。

本書には佐久間象山の叙文があることが知られている。しかし、この叙文をもつものは、管見では②③系のみである。

象山の叙文の日付は、嘉永二年（一八四九）十二月であり、洞海の題言の日付（翌三年春二月）より早いので、刊行準備当初から象山の叙文が準備されていたはずなのに、なぜ①系に叙文が載らなかったのか、その理由は不明である。

本書の出版は、嘉永二年九月の蘭書翻訳取締令に引っかけ、江戸医学館の許可が得られず、安政元年（一八五八）に至って、大槻俊斎の『銃創瑣言』の出版許可を機として本書も刊行されたことは周知のところである。このように成稿から数年遅れて刊行されているから、当然のことながら象山の叙文は初版刊行時点で十分間に合っている。もし①系の重刷のとき載ったとすれば、①系重刷本中での叙文をもつものがあるのか、②③の刊行年の確認をも含め、本書について考察するべき問題が残されている点を指摘しておきたい。

（京都府京都市）